
なぜなら俺は完璧だからだ！

小林実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なぜなら俺は完璧だからだ！

【NNコード】

N4591Z

【作者名】

小林実

【あらすじ】

ちょっとチートな主人公『月見里ヒカル』のらぶえっちあり、ハーレムあり、異世界あり、ミステリーあり、学園都市あり、パンツありの行くとこまで行くストーリー。

1・なぜなら俺は、完璧だからだ（前書き）

この小説は短気な方、純粋な方、真面目な方はご傾読をおすすめしません。なぜなら、主人公月見里ヒカルはなんでもできてしまうからです。

1・なぜなら俺は、完璧だからだ

「月見里、今回のテストも100点だったな」
先生が言った。

「ありがとうございます」

当たり前だ。なぜなら俺は天才だから。努力なんかしなくても全てできる。だから学校生活っていうのは何だか退屈だった。
嫌になりながらも、靴箱を開けると無数のラブレターが。

「困るよなあ、勝手に好きになっちゃうから」
ヒカルはそれを一つ残らずゴミ箱にぶちこむと、友達と一緒に歩いた。

「相変わらずお前はすごいな」

友達が言う。そんな時、異世界への扉が目の前に現れた。5分で魔王を倒し、世界に平穏が訪れた。

「勇者様、あまりに早すぎです」

爺が言つ。

当たり前だ。なぜなら俺は完璧だからだ。
俺は爺に見送られながら、朝の学校に戻る。

6分後、きやーという叫び声がして、殺人事件が起こった。

「あいつが！……あいつがオレの妹を！」

完全犯罪と思われた密室殺人が、犯人の自供までおよそ4分。
当たり前だ。俺のIQは200だから。なんなら300でも良い。

400でも構わない。

無事に教室に着くと、そこはハーレム王国だった。

「お帰りなさいませご主人様」

甘い声とともにメイド服の女子たちが俺を迎えた。

金髪ツインテールのミニスカ娘は茶を運び、清楚系ロングヘアの委員長は俺に団扇を仰ぐ。

男の娘もいた。そして無条件で全員脱ぐ。パンツも見せる。

残りのクラスメートはドラゴンと戦っていた。副委員長は水属性で、月島は土属性、川西は光属性。総攻撃をしかけているらしいが、どうやら苦戦しているようだ。

現場に行って、炎属性の俺が一撃で仕留める。ドラゴンがその場でくだばる。また姫を娶った。

4分後、ラブコメになった。全員寝取った。
かつては魔法学校にも行つたが、当然俺に並ぶものはなく、3日で卒業。潜在能力がパないらしい。

日常系もやつた。バンドもやつた。人気の陰りは窺えない。

「お前のイケメンリア充つぶりはすごいな」

「イケメンじゃないよ、冴えない普通の男子高校生だけどなぜか勝手に何でもテキて、モテるんだ」

俺は言った。

「何だか無性にケンカがしたくなつた、てめー、この野郎殴るぞ」
友達が不良になつた。

「俺は戦いたくないんだけど、そっちから手を出すんじゃないしちゃうがないよねー」

俺は不良を一撃で成敗した。

「危ないとこを守つていただきありがとうございます。結婚してください、妻になります」

か弱い女の子が言つた。

「……君もか？」

俺はまた婚約者を増やした。

また歩くと、さらに別の子が話しかけてきた。

「私が部長を務める、ちょっとマイナーな文化部に入りませんか」

「面倒なのは勘弁だけど、美少女が言うならしかたないね」

俺はその文化部の幽霊部員になつたが、なぜか俺を中心としたドタバタ騒動が起こり、いつも最後は俺の裁量で幕を下ろす。ツンデレだつた部長もテレた。

「ネトゲでもやるか（ 、 、 、 ）」

ネットゲームの世界でも俺は天下をとる。敵はいない。ニコ生ではアイドルで、twitterのフォロワー数はガガとならぶ。暇つぶしに小説を書けば新人賞を総なめし、趣味でスポーツをやったが全国大会を全て優勝してしまってるのでダメだ。

「俺は超頭が良いのだ。もちろん参謀をやらせろ！」

なんだか大戦が始まっていたらしいのだが、俺の戦略が的中し、見事大勝した。

「……帰るか」

「お帰り、ヒカル」

両親が海外転勤をし、幼なじみを始めとし数々の女性キャラクターとも同棲生活を送っているのだが、全員が勝手に惚れてしまってダメだ。

妹も姉ちゃんもいるが生まれた時点で俺に惚れているので論外。

何もかも簡単すぎて、退屈だ。つまらない。

そんな月見里ヒカルは、小説家になろうの平均的キャラクターである。

1・なぜなり俺は、完璧だからだ（後書き）

最近のなまらの小説は凡見里ばっかりで退屈だなあ……。

2・月見里ヒカルと異世界

最近、やたら異世界の人気があるので俺も行ってみることにした。

「そうだ、異世界行こう」

俺は思い立つた。

ちょうどそんな事を思つていたら、目の前に異世界の扉が現れた。異世界に着くと、露出の多い服を着た美少女の剣士と、露出の多い服を着た美少女の銃士と、露出の多い服を着た美少女の格闘娘と、黒っぽいロリータの魔法使いがいた。

「あなた……名前は？」

美少女が聞いた。

「月見里でも小鳥遊でも、バカが喜びそうな名前なら何でもいい」

俺は名乗つた。

「魔王を倒してください」

爺が脇から歩み寄り、言った。

「という事だ、今すぐ魔王を倒しに行く」

「えー、まだ、初期装備ですよ」

美少女が言った。

「構わん。俺は時間は無駄にしない主義だ」

「……そんなあ、ギルドとかやらないんですか？」

「金なら魔王から略奪すればいい」

「でもー、魔王の城まで遠いですよ？」

美少女が言った。

「そこにプリウスあつたろ。飛ばしてくれ。あと、魔王にもアポ取

つとけ、着いたらすぐ決戦だ」

走ること20分、俺たちはラスボスと対決した。

「よく着たな」

魔王は言った。

「セリフは飛ばす、じゃあ斬るぞ?」

俺は厨二へと名前のソードを魔王に向かつて振り下ろすと、魔王を倒した。

「ぐおおお! 嘘だ! 」の私が負けるなど!」

魔王討伐などたやすい。なぜなら、俺は完璧だから。

「よくぞやつた。勇者よ

王が言った。

「やりましたね」

美少女が言った。

「勇者さま、好きです」

剣士が言った。

「勇者さま、結婚してください」

銃士が言った。

「付き合つてあげてもいいんだからねつ」

格闘娘が言った。

「勇者さま、好きです」

ちょうど車庫入れを終えた魔法使いが、運転席のドアを閉め、言った。

「勇者よ、私の娘を嫁にやひつ」

王が言った。

「よし、俺はもう現実世界へ帰るぞ。王よ、扉の場所まで運転しろ!」

「かしこまりました」

王は魔法使いからキーを預かり、帰路を飛ばした。

「他の作品が10万文字かけてやることを、1000字以内で済ます俺……。自分の才能が怖い」

勇者は帰りの車内で呟いた。

3・月見里ヒカルのミステリー

俺が一室で食事をしていると、隣の部屋からきやーとこつ声が。どうやら殺人事件が発生したらしい。

「うるせえなあ。俺はまだメシ食つてんだよ。謎解きはメシの後にしぃ」

俺は言った。食事を終えて、腰掛けイスでゆづくりしていくと、刑事が来て事件の詳細を説明した。

「ガイシャは真田倫弘、18歳。金銭などが取られた形跡はなし。部屋も完全に施錠されていて、密室殺人です」

刑事は淡々と語る。

「怨恨だな」

「犯人はトンネルを掘つて脱出したんですよ」
美少女お手伝いキヤラがわざとありえない回答をして、俺を立てる。

「いや、現場は3階ですし、銀行強盗じゃないんですから……」
読者サービスでこいつおもしろくもないバカみてえなことやらぬといけないから、探偵の取り巻きも大変だ。

「容疑者を連れてきました。この3人です」

刑事は言った。2人の女性と1人の男性が部屋に入る。

「川崎です」

「山崎です」

「山崎が言った。

「真鍋です」

「真鍋が言った。

「……合い鍵のようなモノを誰かが持っていたとしたら」

急にお助けキャラがそれっぽいことを言つと、1人の顔つきが険しくなる。

その日の晩、なぜか隣の部屋に住むお手伝いキャラのような人が、なぜか電気もつけずに、なぜか帰ってきてから一番にシャワーを浴びようと服を脱ぐ。

お手伝いキャラのような人がバスルームで鼻歌混じりにシャワーを浴びると、背後から怪しそうな人影が。当然手には凶器。

「そこまでだ！」

そこで潜んでいたIQ200の俺がバツと電気をつける。バツと振り返る犯人。

「……さん？」

実は犯人は刑事だった。部下の女性警官がバスルームから全裸で歩み寄る。

「いつ、嫌だなあ。ボクはただ、小鳥遊くんが心配になつて」

一応刑事は反論する。

「つるせえ黙れ」

俺はそれを諭破した。

「私がやりました。部屋の錠はICカードだったので、機材を使って磁気をシヨートさせて開閉しました。真田殺しの凶器はここに来る前に山の茂みに埋めました」

「そんな、どうして……刑事さんが」

美少女が言つた。

「あいつが！ あいつが俺の妹を……」

刑事は興奮気味に動機を語たつた。

「いかなる理由があろうとも殺人を犯しては刑事失格です」

ここで聖人君子たる俺（IQ200）が説教する。

「……いつから気付いていたんですか？」

「君が俺の部屋に来た時からだよ、あの時君は血まみれだったからね」

俺は刑事に引導を叩きつけた。

「じゃあ、先輩はその時からすでに……」

「美少女がIQ200の俺の推理に驚く。

「それに来るの早すぎたしな」

「なんてこつた……」

「刑事はその場で崩れ落ちた。

「……さん」

女性警官とのラブロマンスが始まる。
で、エピローグ。

「刑事さん、あんなに優しくていい人だったのに。何が人を変えて
しまうか分かりませんね。先輩だつて」

美少女お手伝いキャラが言った。

「俺は間違いを起こさない。なぜなら俺は完璧だからだ」

「そうですよね。先輩はIQ200、全統模試オール1位ですから

ね」

「うむ。おまけにイケメンで運動神経も抜群だ」

「好きです、結婚してください」

美少女お手伝いキャラが言った。

4・月見里ヒカルの10割バッター

どうやら「ラッガー」を読めば甲子園に行けるらしいこので、俺もやつてみることにした。

「ドラッガーも読んだし、野球やるか」

俺は野球部を訪ねた。

「お待ちしておりました、月見里先輩」

野球部員は言った。

「うむ。しまっていこうぜ」

「ポジションはいかがいたしましょうか?」

「俺は守備はせん。DHだ」

「高校野球にDHは無いのですが、月見里先輩がそつおつしゃるのなら」

そうして俺は指名打者となつた。無論4番だ。

「月見里様、今日は全国高校野球選手権大会、予選日にございます」「結局あの日を境に部活には一度も顔を出していない。なぜなら練習などする必要がないからだ。」

「よし、今日が本番だ。優勝しようぜ」

「はい。月見里先輩のために全国から選りすぐりのピッチャーや内野手を集めました」

「あれ? お前ショートじゃなかつたの?」

「外野の任を貰いました。ポジションさえあれば、私は十分にじいざいます」

野球部の前キャプテン、元ショートの堂島は言った。

「まつ、先発に県出身者が1人もいねえとこもあるからな。ウチなんてかわいいもんよ」

そして俺はグラブも持たずに球場に赴いた。

俺はユニフォームに初めて袖を通すと、試合開始に立ち会つた。

「初めまして、月見里くん。よろしく頼むよ」

監督は言った。俺は挨拶を済ますと、ベンチに座つた。

「好きです、月見里くん。付き合つてください」

マネージャーが勝手に俺のことを好きになるが、気にせず試合に集中する。俺たちの攻撃はウラなので、DHの俺は暇だ。

「はい。月見里くん、頑張つてね」

また違うマネージャーが俺に麦茶を差し入れする。

「月見里先輩、相手チームのデータをご覧になりますか？」

後輩マネージャーが言った。

「いや、いい。俺にはデータなんぞ必要ねえ」

そうだ。俺にはストレートであれ、フォークであれ、ショートであれ、ストライク（バットにボールが届く場所）にボールが来さえすればスタンンドに運べるのである。

「頼もしいね、期待してるよ」

監督が言った。

テンポよくアウトを重ねると、1回ウラへ。1死1・2塁の場面で指名打者、俺。

「おかしい……何だか急にド真ん中にゆるいストレートを放り込みたくなってきた」

相手ピッチャーがそんな事をぼやいた。

ピッチャーが投げた初球をバットに当たると、打球はたちまちきれいな弧を描く。ホームランだ。

ホームに帰墨した俺を堂島がハイタッチで出迎えた。

「さすがにござります、月見里さま」

堂島が言った。

「つむ。お前たちもがんばるが良い」

俺は何だか急につまらなくなつて、寝ることにした。

「月見里さま、打順にございます」

俺は堂島に起された。2順打だ。俺は眠気の残るまま打席に立つた。

初球、大きく外してくる。

2球目、ソロを叩き込む。俺は悠々と帰塁した。

3順目、俺は敬遠されるようになつた。特にやることもないのに盗塁する。ホームスチールで1点取つてやつた。

「月見里さま、『ご大儀で』ございました」

堂島が言つた。

その後、この試合はワールドで大勝した。

次の試合も、その次の試合もだいたい同じような感じだった。

そうなると『明徳義塾対星稜』の松井のように全ての打席で敬遠されるようになつた。直前の打者に対しても四球を取るので、無闇に盗塁もできやしない。

たまに勝負に来るやつもいたものだが、すべてスタンドに運んでやつたため、もはや俺に対してストライクを投げ込む投手は皆無となつた。

そうなると、野球というより何か違うもののような気がしてきた。

「堂島、どうにかならんか」

俺は言つた。

「さあ、私も敵チームに対してはビリにも……」

俺は野球部を勇退した。

サッカーもやつたのだが、だいたい同じような感じだった。

5・月見里シェフの一見をとお断り

俺は自炊もする。なぜなら俺は完璧だからだ。

「うし。作るぜえ」

冷蔵庫にあつたのは、マヨネーズと、卵と、ケチャップ。それにキムチ。

俺はそれらを駆使し、麻婆豆腐を作った。

「うむ。なかなかイケるな。俺は料理家としても大成するんじゃねえか?」

という事で俺はフランスの5星ホテルの厨房に、弟子入りを志願した。

幸い、門前払いではなく、鍋ぐらいは触らせてくれた。こういう輩には、ダメだダメだ話にならない、などと難癖を付けて帰らせるらしい。

行きの飛行機でフランス語の勉強もしてきたので、通訳もいらない。

「じゃあ、いくぜ」

材料もまかないレベルのものしかなかつたが、俺はとにかく文字で表すのもままならないようなスゴい料理を作つた。

「すげえ。鍊金術だ」

若いシェフが言つた。

「そんな……嘘だろ」

ベテランシェフが言つた。

「味も……いい」

シーフ長も言つた。ぶっちゃけ何を作つたのか俺でも分からぬ。

「この肉、どうから仕入れたんだ?」

ベテランが言つた。まさかくすねたのか、と言わんばかりの表情だ。

「まさか……くすねやがったのか？」

若手が言つ。

「おいおい。よしてくれよ。俺は来てからずっとこの厨房のこの場所にいたんだぜ。最高級の肉が、勝手に適切な大きさに切られて、勝手に料理の中に入つたに決まつてるだろ？」

俺は言つた。俺の料理はオートマなのだ。

「それもそうだな」

若手が言つた。

「疑つて……すまなかつたな」

ベテランが言つた。

「ツキミーザート」君は今日からこのクルーの一員だ」
シェフ長が言つた。フランス人は漢字が読めないので『月見里』を『ツキミザト』と読んでしまつ。困つたものだ。

「ヒカルでいいぜ」

その後、3日間の修行を得て俺は独立することにした。技術を全て学び取つたのだ。

「いらっしゃいませ」

フランスの一流ホテルで修行を積んだ俺の料亭に、今日も客が来る。もちろん店は日本料理の店だ。

「月見里さん、あの方、美食俱楽部のお偉いさんですよ」

声を潜めて若手が言つ。

店を構えて一週間、数々のメディアの取材が来たが、全て断つてきた。こういう輩も追い返してきた。

ちなみにこの若手はあるホテルから輸入してきた人材である。

「申し訳ございまへん。ウチは一見さんお断りどうえ」

フランス語なまりの若手が言つ。

「いや、ぜひこちらの料理を食べたいのだ。紹介者もすぐ来る」
彼がそう言つるので、俺は仕方なく上げることにした。紹介者もすぐ来た。確かにウチの客だ。

「どうするんですか。厨房の冷蔵庫に七味唐辛子しかありませんよ」

若手が言つた。

俺は若手に着物を着せて懷石を運ばせた。

「ほう。ライチか……」

お偉いさんは土瓶蒸しを味わっていた。

「なぜ、土瓶にライチなのだ？」

お偉いさんがそういう事を言つたので、若手は俺を呼んだ。
「料理長よ。なぜ土瓶にライチを入れた？ よもや眞がそういうからだという短絡的なものではあるまいな？」

お偉いさんは言つた。俺はライチが入つた事でえ氣が付かなかつたのだが。（むしろ土瓶と言つからにはかぼすかと）

「はい。勝手に入つたからでござります」

「なんと……」

「私の料理はオートマ式ですので、入つた材料が最適な材料だといふことになります」

「はつはつせ、いやつめつ」

なんとかお偉いさんを納得させる事ができた。

俺は厨房に戻つて再び料理を作る。事は順調に運び、俺はシメの一品を若手に運ばせた。

「ムウ……ダシのとりかたは完璧、調味料の配合も申し分ない。酢を使つてゐるが、酢のキツイ香りを巧みに抑えてある。ふむ……全体的にわざと香りを抑えてある……いや待て……かすかに……かすかに何か香りをつけてあるぞ！ このわずかな香りが、この何もないの味も匂いもなきものに、鮮やかでふくよかな風味を与えているのだ……この香りはなんだ？」

急にお偉いさんは考え込んだ。

「おのれ！！」この雄山の味覚と嗅覚を試そつとこつのかつ……」

お偉いさんは、激怒した。

「かつ……海原さん」

紹介人が言った。

ドスドスといつ音を踏み鳴らして、お偉いさんが厨房に乗り込んで来た。

「この料理を作ったのは誰だ！！」

お偉いさんは怒鳴った。

「おっ、俺です」

俺は言った。

「きさまか！ この雄山を試すような真似をした小僧は！ 問題はこの香りだ、木の実だ……木の実をもいで酒に漬けておいて、木の実の色と香りのついたその酒をツユのなかに入れた！！ そうだな！」

「…………おそらく」

俺は言った。

「問題は木の実だ、木苺でもない、すぐりでもない、さくらんぼでもない……『ケモモでもない……桑の実だ！！ そつだらつ！！』

「…………雄山さんがそうおっしゃるのなら」

俺は何が何だか分からぬがとりあえず頷いておいた。

「ふつふつふ……この雄山を試しあつて、生意気な小僧だ」

そう言つと、その口はお偉いさんは満足そうに帰つていつた。

それから、その爺さんはちょくちょく来るようになつて、何だか

俺は面倒くさくなつたので店を畠んだ。

6・やまなし！

日常系をやつてみたいと思ひ。とりあえずタイトルを4文字にすりやいいんだろ？

「俺あ、いつナーゆりつづーのをやつてみたかったのだ」

俺がそう言ひうと、俺は美少女になつた。

「けけけっ……完璧すぎる俺が怖いのう」

美少女はしたり顔で言つた。

美少女は登校する。

「月見里、お前美少女になつたのか？ やつぱお前スゲーよ」

かつての友が言つた。

美少女になるなど造作もない。なぜなら俺は完璧だから。

「おうよ。道を開ける、かしづけ。美少女のお通りだ」

美少女は朝の廊下を渡つた。

「月見里くん、女の子になつたの？」

教室に入つてから、女子が言つた。

「まあな。イケメンのままだと勝手に惚れられて、最近じやあ会話すらまともにできねえし」

俺は言つた。

「きやー、女の子の月見里さまも凛々しく「う」やこます」

女子が言つた。

「今日のテーマは日常系なのだ。お前らと友情を育むのだ

「そうなると、3～5人編成がいいわよねえ」

女子が言つた。

「いやあ、何人でも構わない。けいおんとかAチャンネルとかゆるゆりみたいな、あーゆうオタクどもにウケそうなしょーもない日常が送れればそれでいい

「

「女子がくつちゃべつてりやそれでいいわけですね」「女子が言つた。

「おう。萌え萌えな感じで頼む。たまに脱げ」「俺は言つた。

「さて、晴れて女子高生になつたことだし。一服、飲むか」「えー、教室だと火災警報機が作動しちゃいますよー」

女子が言つた。

「しゃーねえ、屋上行くか」

俺は言つた。

「だめだよ、月見里ちゃん」

委員長が言つた。

「おー、委員ひょさん、よく聞いてくれ。俺たちや、天下の女子高生だ。だから何をやつてもいい。タバコをふかしても、昼間つから酒を呑んでも、『自肃』を『自肃』しても良い、なぜなら、俺たちは女子高生だからだーー！」

品行方正な俺が委員長に教えを説くと、教室は拍手喝采。全ての者が俺の意見に賛同した。

「分かつたわ。ごめんね、月見里ちゃん」

「いいつてことよ」

俺は屋上に行くことにした。

「月見里、お前はかわいそうだよ」

「屋上。手すりに寄りかかって、メンソールをふかしていると。一人の教師が話しかけてきた。

「ああ？」

俺（美少女）は言つた。

「何の努力もせずに、全てのものを手にできるのは……かえつてかわいそุดと言つたんだ」

教師は若い男性で、熱血が好きそうな感じだつた。

俺はすでにこの時点で今すぐで殴りかかりたいくらいカチン

ときていたのだが、会話を続けてやる。

「つらやましいなら羨望しる。ねたましいなら嫉妬しる。……同情だけはよせ」

俺は自分の境遇を同情されるのだけは、大嫌いであり、苦手であり、かつ、まっぴらごめんであった。

「あんた、いつだか言つてたよな。『俺も昔は相当出来が悪くて』つて……やっぱり俺のこと、つらやましいんじゃないのか?」

お返しに、俺は一つ噛みついた。

「うぬぼれるな。俺は底抜けのドベだが、天才をつらやましいと思つたことなど一度もない。特に、ろくな努力もせん天才に対してもな」

「じゃあ何なんだよ!!」

俺は怒りにまかせて聞いた。

「ただ……かわいそうだとと思つたんだよ」

そして、教師は最も俺の逆鱗に触れる言葉を口にした。

「なぜなら、お前が完璧すぎるからだ」

彼は、一番言つてはいけないことを言つた。

俺はついに我慢がならなくなつた。激昂も通り越して、悪意もわいてきた。

「あつ……ああ、そつか。先生、ありがとよ。言いたいことは分かつたぜ……感情的になつて済まなかつたな」

美少女は最も劣悪な笑みを浮かべて、この先生に取り入ろうとした。

彼女は、この教師を、痴漢に仕立て上げようと思つた。

6・やまなしー（後書き）

作中、『白瀧』を『白瀧』しても良い、はかな
り過激な内容であるため、原文のまま投稿しようか悩んだが、掲載
直前で訂正した。要するに口和つた。

あたいは月見里ヒカル、16歳、JKだよ(・・・)
今日は、むかつく教師を痴漢にしたてあげちゃうのだ(ゝ・・)
ニヤ。

美少女には、一人の男の社会的地位を失墜させる簡単な方法がある。それは、電車で身体を密着させて一声張り上げるだけという、他愛もないことだった。

これがあたいが思いつくあたり、一番簡単な方法だつた。

「まもなく、2番線より……行、各駅停車、10両編成が参ります」
アナウンスが伝える。

「せんせつ！」

おたしに聞いた

先生は言った。

「いつがむかつく先生なのだ。だから今日明日づけでこの先生には学校を辞めてもらうのだ。

「川使わなしてすか?」

「娘が習う事始めてから、嫁に取られたよ」

はつは、と笑いながら先生は言った。

笑顔とかまじキモい。
死ね！ 氏ねじやなくて死ね（#）。

「余四娘娘の誕生日が、

「きやー、かわいーーー（。）」おめでとうございます

L

あたいは笑顔で言つた。娘の誕生日に痴漢をはたらく教師……悪くねえな。そりやあこっちのニヤケも止まんねえつてもんよ。

「ははっ。お前も案外、かわいいトコあるじゃないか」

そう言つと、先生はあたいをなでなでしてくれたのだ。

「やーめーてーくださーいーっ」

あたいはふりつ娘した。待つてろよ、お前の最後までもうすぐだからなつ。

もういつそここで申告してしまいたい衝動に駆られたが、車内じやないと人混みに紛れて逃げられてしまう可能性があるのでダメだ。そういうしていると電車が来た。うちらはそれに乗り込んだ。

あたいは先生の隣についた。座席は座られているが車内はガラガラ。これでは不自然なので、あたいは乗客が多く乗り込んで来る3駅先まで待つことにした。先生は5駅目で降りるので、それからでも十分だつた。

「せんせー、私がかかわいそつてどつてつコトですか？」

あたいは言つた。

「いや、お前、前言つてただろ？ 10分も勉強すりや司法試験受かるつて」

「あははー、聞いてたんですかー？」

あたいはバツが悪そうに笑つた。

「それで俺は、確信した。お前は正真正銘、天性のモノホンだつて」
当然、この人は教師だから全統模試一位、定期テスト学年首位のバケモノの存在は認知しているはずだ。

「えー、照れーるうー。先生まじサンクスみたいなあー」

「だがな……同時に、お前がかわいそうだと思つたんだ」

「だからさ、それが何でかつて聞いてんだよー！ あんたは現役ん時、勉強が得意じゃあなかつた。何もしなくても首位にあぐらをかける俺が、うらやましいだろ？ 姦ましいだろ？ なあ、頼むから他の教師たちみてーによう、トゲのある冷たい口調で俺の名前を呼んでくれんかのう？」

あたいはふりふり膨れながら言った。

「お前……そんな扱いなのか？ それはそれで問題だな、お前に100点を取らせない会合なんてのも聞いたぞ。今度の職員会議で……」

「おい無理すんな、若造。それに俺は人の嫉妬ややつかみが大好きなんだ。余計なこたあやめるよ」

あたいは先生に言った。

「で、結局あんたが言うところの私がかわいそうな理由ってのは？」

あたいは話を戻した。

「俺がお前をあわれむ理由は、努力が報われる喜びを、お前は知らないからだ」

(#。。。) ハアツ？？ みたいな。

「勉強が不得意どころじゃない、俺は、大の苦手なんて言葉じや生ぬるいくらいの出来損ないだった。俺はお前と同じ高校だったが、学年の最下位はいつも俺の指定席だった。今でも覚えてるぜ！」 5
12／512 「

先生は話の方に熱を入れ始めた。

「ただな、ある日思い立つて……思い切り勉強つてのをやってみた。毎日机にかじりついた……。テスト前日は徹夜もした

「……で？」

「511／512。順位が、一つ上がった」

先生はとても満足そうに、誇らしげな顔で言った。

「最下位を取るために生まれてきたようなやつが、ドベを脱出したなんて分かつたら、もうその日は凱旋帰宅さー！ カーチャンは慌ててスキヤキの食材の買い出しに走り、連絡を受けた親父は同僚との付き合い放つぽつてまで帰ってきた。兄弟はてんてこ舞いで、一家はお祭り騒ぎだ」

「あんた、よく教師になれたよ」

「俺もそう思う」

先生は言った。

「それから、俺はテストがちょっとした楽しみになつた。わずかだが、やればできるという、当たり前の感触を再認識できたからだ。

それから俺の、ささやかな快進撃が始まった

あたいは先生との距離を、ちょっとずつ詰めていった。

「そりゃあツラい時や、苛々した日々もあつたさ。それでもテストや模試が終わるたび、馬鹿みたいにはしき回つたもんだ。もう、上がるしかないような位置だつたからな」

ドアが開く。うちらが乗つてから、2駅目に着いた。

「今でも511／512の通信簿は神棚に飾つてるよ」

先生は言った。

「だが、お前はどうだ？ 全統模試の通知返却の時、オール1位だつつのに、当の本人はつまらなそうに丸めて、ゴミ箱にポイするそうじやねえか。ありやあ、全国の受験生が泣くぜ」

あたいはキレイ好きだから、かわばる書類はガツコで捨てるのだ

(ゝ・)ゝ

「勉強にしろ、何をやろうにしろ頭打ちすぎで、成長する楽しみを、努力が報われる喜びを知らないまま、お前は大人になつちまうんだ」

ちゃんちゃん余計なお世話だった。

「しくしく、先生なりの慈悲を向けてくださつて私は涙が止まりませんよ。えーん、えーん(ゝ・)ゝ」

うちらが乗つてから3駅目。お堀口駅までの到着時刻は、着々と迫つてくる。電車が減速を始める。

まつたく、手間かけさせやがつて。

あんたの教師生命は、ここで終わる。

「だからさ……やつぱり……も……」

さよなら。俺は帰りの挨拶を心の中で済ませた。

電車がお堀口駅に到着。完全に停車した。先生はまだ熱弁をふるつている。

ドアが開いてから数秒、うすらは人の波に押され、車両中央へ。あたいは先生に身体を預けた。

先生、あんたはなかなかだつたよ。ただ、説教をする相手を間違えたんだ。ぐだらん正義感などふりかざさずに、早い話が、俺みてえな浮きこぼれなんぞ放つておきやあ良かつた。

ここまで率直なまでの実直は愚直以外の何もんでもねえぜ。そういうお節介を働くから、今こいつして教え子の謀反にあい、何もかも失つちまうんだぜ？

あんたの敗因はたつた一つ。

あんたは俺を、怒らせた。

「だから……つて、あれ？ もつお堀口か？」

先生が言つた。どうやらふと我に返つたようだ。まあ、いいさ。もう決起の瞬間まで秒読みだ。けれども、何かがおかしい。何だ？

この妙な感じの違和感は。

「……そうですけど」

あたいはすでに身体を密着させ、先生の手を握りつけていた。無警戒な先生の手をやにわに持ち上げて、「痴漢です！」と一声張ればそれでゲームセットだ。

しかし、まさにその時、先生は信じがたいことを言った。

「すまん、月見里……

俺……

「ここで降りるわ」

彼はそうつ言つと、いそくさすいすいと人の流れを縫つて、電車を降りようとする。

「えつ……じつ、じうじへ？ どうしてなのさつ？ あつ、あつ、あんたン家の最寄り駅は、2駅先の砂波じゃなかつたのかよつ！？」

俺は言葉も選ばずに尋ねた。いや、理由を聞かずにはいられなかつた。

去り際、先生がまだ閉まらぬドアの目前で、一いち方に振り返つた。ちよづじ、車両とホームの境界線を越えようかといつ所だった。

「駅前のストレイツで娘のケーキを予約してゐるんでな。じゃあな、月見里」

ストレイツといえばお堀口駅前のケーキの名店。ここいら一帯で、一番ケーキが美味しい洋菓子店である。まさに我が子の誕生日ケーキを任せることには、つづつつけの店だった。

「あっ、ああ……そうだったのか……またね……せんせつ」

俺はあらうことか、今日で終わらせるはずの人間にに対して、『またね』と言ってしまった。

これが、俺の人生、初めての敗北だった。

8・月見里ヒカルの笑婦と淑女

師走の寒空のもと、人生初の敗北が、あたいの頭を一杯にしていた。

「この俺が……敗北？」

信じられない……。

衝撃の敗北から電車に揺られ、適当な駅で引き返し、お堀口駅まで戻った。

家へ帰るには、学校に近い駅へとんぼ返りするよりも、お堀口駅のターミナルからバスなりタクシーなり拾つた方が早く帰れる。「ありえない……」

バスを待つ間も、タクシーの列を眺めるのも憂鬱だつた。

その時、ふつと、眠気に近いめまいが急激にあたいを襲つた。

あたいはふらふらつと車道に引き寄せられる。

遠のく意識の中、クラクションが鳴つているのが分かつた。けれども、もうそんなこと、どうだっていい。聞きたくもない。見たくもない。何もかも。疲れたから。

グシャツッ！！

しだいに意識が戻ってきて、あたいの目の前には悲惨に潰されたケーキの箱があつた。クリームもスポンジもないようにぐちゃりと、見るも無残に挽き潰されていた。

「あほおー！死にたいんけー！」

クルマのドライバーが窓を開け、言った。

「すまんな、兄ちゃん！」この娘も、ちょっと疲れてんだ。許して！！」

後ろから……声？

聞き覚えのある声だ。

あたたかくて、力強くて、頼もしい、お兄ちゃんのよくな声。その人が一言言つと、タイヤにクリームを引きずらせながら、ドライバーは再び車を走らせた。

しばらくして、あたいは腕にも違和感を感じた。

誰かが私のことを支えているのが分かつた。ふらふらと突発的に車道へ飛び出そうとしたバカ娘を、誰かが歩道側から引っ張つて、制止してくれたのだ。

ぬくもりのある、あたたかい身体。

あたいはおそるおそる振り返る。

そこには、先生がいた。

歩道側からしつかりと、華奢なあたいの手を掴んでいる先生がいた。

「どうして……助けたんだよ」

たつた今俺自分を助けた命の恩人に對して、第一声、あたいはひねくれたことを聞いた。

「ケーキは頼めばまた作つてもうれるが、命は一つだらうが……！」

キュン！－

あたいの中で何かが芽生える。

「……娘さんの大事な誕生日に、んーなしけたこと言つなんよ

先生は、あたいを歩道側に引き寄せて、2・3小言をぶつける。それからあたいはふさぎ込んで、そのままバスの停留所の列の脇にへばつた。

「そだつ。せんせつ、あたいのパンツいるう？」

お詫びにあたいは言った。上田遣い攻撃である。

「つけはセキュリティーが厳しいんだ。帰宅します、手荷物検査とケータイチェックだあ」

先生は一息置いて、続けた。

「同僚のハートマークで大目玉だぜ？ 教え子のパンツなんざ持つて帰った日にゃ命の保障はねーよ」

「おー、お宅の密輸捜査官……やりあるなつ

ちょー余計なお節介だつたらしい。

「しかし、参つたなこりや。実のところ……俺はもうお手上げだ」時刻は6時半を回っていた。あたいの命と引き換えに、先生は愛する我が娘へのバースディ・ケーキを失つたのである。察しきれないほどの無力感と、途方もないような虚無感を抱いているに違ない。

「今から頼まれてくれるケーキ屋……探すか……さすがにストレーツには頼みづらいし」

先生は落胆混じりに言った。

「この界隈でそんな所……あるかどうかすら……」

先生は悩んでいる。

「いや、もつと良い方法がある」

俺はこんな時に一番冴えた方法を提案した。

「俺に、任せてくれないか？」

「……は？」

あ然とする先生。そのハートが豆鉄砲食らつたような顔に、もう一回、俺流のクールな提言をぶち込む。

「娘さんのケーキを作らせてくれと言つたんだ。そのアスファルトの上で潰れてるのよりも、何倍も良いのを作つてみせるぜ」

俺はアスファルトの上でくたばつている、この界隈で一番つまケーキを指差して言った。

「そんなこと……お前にできるのか？」

「できるわ。なぜなら俺は……」

先生の前で、この文句をいつのを一瞬ためらつたが……やはりこの言葉じゃないとしまりがないので……俺は自信満々、いけしゃあしゃあと叫んだ。

「なぜなら俺は、完璧だからだ……！」

「……心配だなあ」

先生は明らかに信用しない口調で言った。

「まかせろ。こいつ見えて俺はフランスの 5 ホテルで修行したこともあんだけ？」

「……それ、パーティションとしてなんだろうな？」

俺は聞こえないフリをして、キッチンを貸してくれるとこを探した。

すると、ビルの窓ガラスから明かりが灯っている教室が見えた。製菓学校だ。駅前という何とも恵まれた立地。これを利用しない手はない。

「せんせーは先に帰つてて」

「おっ、おい！……」

「大丈夫。とびきり豪華な誕生日ケーキを、後でお届けするから」

俺はタクシーを拾つと、車内に押し込むようにして先生に帰宅を促した。

俺はその後、駅のパソコンとプリンタで学生証を偽造し、製菓学校に乗り込んだ。

「すうじい！ 天才だ！」

製菓学校の教員が、オレのケーキをべた褒めする。

「くつ……こんなのが作れるなんて」

学生はズブの素人の俺に嫉妬する。

「ケーキを運ぶから、保冷剤と箱をもらひや」

俺は箱をかづぱらうと、先生の愛娘の誕生日にふさわしいラッピングをする。

「プレゼントですか？」

「あー、せめて、写真だけでも撮るひよー？」

女子生徒が俺に言った。

「ごめんね。ちょっとちいお急ぎなんだ」

俺はそつ言い残すと、製菓学校を出た。免許證伝。事実上の卒業だった。

「つひてもよう。そのまま押し掛けて、ちわーす、ケーキのお届けにあがりましたー、つてのも芸がねえよな？」

俺はふと考える。粋なはからいの一つでもできぬいものかと悩んだ。

「いこひはちよつと俺様の裁量で……」

そう言つて、俺はケータイの電話帳を片端から漁つた。

ピンポーン！

俺は呼び鈴を鳴らした。

「すみません、 配送でーす。一神奈々さんいらっしゃいますか？」

俺（美少女、宅配着姿）は言つた。

「はつ……はーいつ」

まだ8・9の女の子の、幼い声がインターホンから聞こえた。

「何かなか？ 奈々ちゃん、出てこいらう？」

遠くで、若い奥さんの声が聞こえた。

ガチャリ！

今日の主役が、ドアを開ける。

「セーのつーーー！」

俺は音頭をとった。

「お誕生日おめでとうーーー 奈々ちゃんーーー！」

先生の家の玄関前に、集まつた40人の高校生が一斉にクラッカーを鳴らし、声をそろえて奈々ちゃんを祝つた。

2・5。男女総勢40人。二神敬一のクラスの生徒たちである。

最初はびっくりしたようだが、じばらしくして、よつやく奈々ちゃんは恍惚に近い表情を浮かべた。

「たくみー。交通費も小道具代も自費だせえ」

「ひりひーー。せつかくのお祝いムードが冷めちゃうでしょ。そんなこと言わないーー！」

「やつだよー。二神先生にはお世話になつてゐるから全然だいじょぶだよー」

「何だかんだ言つて斎藤、お前が一番世話になつてゐるだろ？がー！」

「まつ……それもそだな」

姦しい軍団が一斉に騒ぎ出す。

カブライズに心躍ったのか、奈々ちゃんが「ひりひりに向かって走り出しだった。

「奈々ちゃん、お誕生日おめでとう……こへつになるの？」

「はいっ……10ですっ」

奈々ちゃんはちょっと緊張しながらも、凛として答えた。

「……はいっ、これ。お誕生日プレゼント」

そう言って彼女は、奈々ちゃんにプレゼントを差し出した。

「コレもー！」

また、一人の女子が差し出した。

「奈々ちゃん、このお人形、かわいいでしょ？」

「奈々ちゃん、このポーチも」

といろどいろから声があがり、あれよこれよとプレゼントの嵐。

奈々ちゃんは40の好意に埋もれた。

「まったく、たいした奴だよ。月見里ってのは」

「だよねー。沙紀の塾の課題も、私たちの宿題も、珠洲屋くんの部活のとんぼかけも、全部肩代わりしちゃうんだから」

「普段からお世話になってる一神先生だし、来ない理由がないよねー」

「まつたぐ、たいした奴だよ。月見里ってのは」

「さすがに、あいつの執念はすごいかったなあ……普段の傍若無人と手抜き加減が嘘みたいだ」

一同は姦しく騒いだ。

「奈々ちゃん、お誕生日、おめでとう」

そう言つて、あたいは奈々ちゃんにケーキを渡した。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「ここに集まつた人たちはねえ、お父さんのクラスの教え子たちだ

よ?」

「じゃあ、お姉ちゃんもパパのクラスの生徒なの?」

「違うよ?」

奈々ちゃんは目を丸くして、あたいを見上げた。

「じゃあ、お姉ちゃんは?」

奈々ちゃんがそう言いつと、彼女の背後のドアが開く。なんだんだ、とばかりに先生が家から出てきた。

「お姉ちゃんはねつ、パパに大切なことを教えてもらつたんだ」

これが、あたいの人生初の敗北に対する“お返し”だった。

9・「神敬」と『お嬢ちゃん、万引きしたんだからわる誠意を見せてよ誠意を』

スーパーとかの店長をやれば、万引きした女子高生といいことで
きるらしいので任されてみた。そういうシチュエーションをDVD
で見たのだ。

「すいません……」

少女は言った。

「すいません……」

名張夕立ドラッグストア終身名誉一日店長」と俺は言った。

「キミねえ……困るなあ万引きってのは」

俺は続ける。

「しかも、力ゴ抜けじゃないか」

少女は顔を突っ伏したまま。

「……すいません」

「これは初犯じやあないね」

俺は続ける。

「これは通報だよ。通報」

そう言つと、少女は白い固定電話の受話器を取る俺の手を掴みながら。

「……お願いします。もうしませんから」と泣きながら言った。

「いや、でもねえ。分かるかい？」

俺はニヤリと笑つて少女との距離を詰める。

「……ひつ！」

「従業員の給料だつてね、君がレジカゴにぶち込んでひょろまかそ

うとした、つけまとかの本来の売り上げで支払われるんだ」

「「めん、なさい……」

泣きながら少女は言つた。

「お嬢ちゃんはね、棚から下りたりじゃない。豪快にカゴにビーツ
そりと、僕たちのお給料を持つてこられたんだよ」

俺は言つた。

「これは許されることじゃあ……ないよね？」

しばらく少女は黙つた。

「さつ、もういいかい？」

俺は諭すように言つた。

「おねがいつ……します」

ポツリと、少女は言つた。

「えつ？」

「お願いします！ 何でもしますからー 通報だけはー」

「ほう……何でも？ 言つたな小娘」

俺はほほうと啖呵をきつた。

「本当に、何でもするんだな？」

「……はー」

俺はねつとりと万引き少女を視姦する。

「ダメだぜえ、年頃の娘さんがそんな軽口たたいぢやあ……」

ひらと、少女のスカートが揺れるのを見た。

#ここから先は単位と引き換えになります #

続きを読むためには、このノートの判定をAとしてください。

「下へ……下へー？」

「神敬一はペンを止める。

「誰のだよ、このノートはーー。」

彼は言つた。

「下へちは徹夜で課題見てやつてるんだから、誠意を見せろよ誠意

をおおおーー

敬一はその妄想ノートにでかでかと、太い水性の赤ペンで『ペケ』
を付けた。

10・月見里ヒカルの男性恐怖症（前書き）

今回のお話は、男性恐怖症の方は閲覧をご遠慮いただいた方が良い（／かもしれません）です。といっても、たいした話ではないのですが。

10・月見里ヒカルの男性恐怖症

最近、男性恐怖症のキャラが人気らしいので俺（美少女）もやってみることにした。

「俺、今日から男性恐怖症だから。お前は死ね！死ね！クズッ！男はキモいから死ね！」

登校して開口一番、俺（美少女）は友達に言った。

「……そんなん」

「処刑だ処刑。男子は全員去勢なつ」

俺（美少女）は言った。

「強引だなー、やり方が」

友達は言った。

「ひつ……ヒカルは、男の人怖いんですね」

怯えながら、俺は言った。

「まさかヒカルにもがれる日が来るとは……」

友は、絶望した。

「どう、どうしたのヒカルちゃん」

女子が言った。俺は制服をめちゃくちゃに乱して、教室に顔を出した。

「乱暴……されたの？」

委員長（女子）が顔つきを険しくして言った。その問いかけに、俺はしばらく間をとつて、うん、と一つだけ頷いた。

「あのね……男子がね……何もしないからって」

泣きながら俺（美少女）は言った。発言の後、3・4人くらいの女子が「ちらり」と見てきて、抱きついた。頭を撫でてくれたりした。

「ひどいーー！」

一人は言った。

「誰にやられたの！？」

「……君と、……君と……君とか」

その言葉を皮切りに、女子による男子討伐軍が結成された。女子は武装している。護身用のスタンガンとか護身用のタガーナイフとか護身用のレボルバーとか色々な兵器を各自持ち合わせ、男子を襲撃。これにより1組男子は陥落した。

「まだまだ数が足りねえなあ。3組にも行つてみるか」

ちょうどその時、後ろで銃発の乾いた音がした。女子軍が2組男子に奇襲をかけたらしい。

まさにフレンドリー・ファイアである。

「……オチは？」

女子は半殺しにした男子に聞く。

「知らねえ……よ……」

遠のく意識の中、頭から大量の鮮血を流して、男子は言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4591z/>

なぜなら俺は完璧だからだ！

2012年1月5日20時54分発行